

性的モノ化と少女のセクシュアル化

—「萌え絵」騒動を考えるための予備作業—

江 口 聡

(京都女子大学現代社会学部教授)

国内 SNS で頻繁に話題になる「萌え絵」ポスター論争を理解するための準備作業として、まず哲学分野における「性的モノ化」と心理学分野における「セクシュアル化」という批判が萌え絵に適用できるかを考察する。「セクシュアル化」は問題の理解にあたって可能性のある概念である。

キーワード：性的モノ化、セクシュアル化、性的消費、萌え絵

1 萌え絵騒動

国内で、ジェンダー／セクシュアリティ問題に関する関心が高まり、SNS が社会に広く浸透した2010年代から、アニメやマンガ、ポスターなどのメディア表現をめぐる「炎上」事件が頻繁に生じるようになった。おもなものをあげただけでも、人工知能学会の雑誌『人工知能』の表紙（2013）、三重県志摩市の御当地キャラクター「碧志摩メグ」（2015）、岐阜県美濃市のアニメ『のうりん』とのコラボポスター（2015）、Vtuber「キズナアイ」を起用したNHK ノーベル賞受賞解説（2018）、マンガ『宇崎ちゃんは遊びたい』のキャラクターを起用した日本赤十字社の献血ポスター（2019）、アニメ『ストライクウィッチーズ』を起用した自衛隊のコラボポスター、タイツメーカーのアツギの「ラブタイツ」キャンペーン（2020）、Vtuber 戸定梨香を起用した千葉県警のキャンペーン（2020）、各温泉地での「温泉むすめ」キャンペーン（2022）、マンガ『月曜日のたわわ』の新聞広告（2022）、オンラインゲームの「雀魂」とマンガ『咲』のコラボ広告（2022）などがある。そうした広告や広報の表現は女性差別的であるとする批判が SNS を中心に広がり、それぞれ擁護派とのあいだで論争となり、いわゆる「炎上」状態となる。一部は発表者の当初の予定が変更されるに至っているということである。10年以上にわたって、「萌え絵」批判派あるいは「フェミニスト」と、

擁護派あるいは「表現の自由」派との間で、激しい論争が断続的に続いている¹⁾。

これらの炎上や論争の共通点は、その話題の表現物が、(1)ほとんどの場合はポスター等で使用されるキャラクターが実写・生身のタレントを用いたものではなく、二次元表現物での現代的なアニメ的な表現スタイルのキャラクターであり、(2)描かれている人物が10代からせいぜい20代前半の少女、つまり若年の女性たちであり、そしてなにより(3)女性の身体的・性的な魅力が強調されている、という点である。つまり、若年女性の性的な魅力を強調した二次元表現物、いわゆる「萌え絵」が問題だ、というわけだ。一部の論者によれば、それは性的な表現の問題ではなく女性差別の問題だとされる。

こうした「萌え絵」広告に関する論争は非常に多くの要素を含んでいて、なぜそれが問題とされているのか、またそれぞれの主張の是非はどうか、ということの分析や理解は簡単ではない。本研究ノートではこうした萌え絵騒動を考えるための予備的作業として、「性的モノ化」とともに最近英語圏の心理学およびメディア研究で頻繁に論じられる「セクシュアル化」を紹介しておきたい。

2 性的モノ化／客体化

2.1 性的モノ化：人をモノとしてあつかう

SNS で問題にされる「萌え絵」が倫理的に不

正である、あるいは少なくとも倫理的な懸念があるのは、それが「性的モノ化／客体化」であるためだという見解がある。たとえば社会学者の牟田和恵はオンライン論説において、話題になっているポスター等での「萌え絵」表現は女性（少女）を性的な対象としている（性的対象化）ために問題なのだと主張している。彼女は、萌え絵ポスター等は「女性を性的対象物として描くこと」であり、「女性の性が断片化され、人格から切り離されたモノと扱われることが、女性蔑視・女性差別だから問題なのだ」と述べている（牟田 2019）。

この、英語圏でポルノグラフィ（ポルノ）を批判するフェミニストたちによってよく用いられた sexual objectification、日本語にすると「性的対象化」「性的客体化」あるいは「性的モノ化」という概念については、過去の拙論である程度扱ったので、ここでは簡単に論じたい。

以前に紹介したように、現在の英語圏の哲学者たちによれば、「モノ化」（objectification）とは、本来モノ、物体や動物とは違う価値をもった人（人格、person）を、モノや単なる物体や動物と同様のしかたで扱うことである（訳語の問題は本論末尾で補足説明をおこなっている）。性的モノ化は1980年代の第二波フェミニストたちが共通に問題視した現象である。哲学者マーサ・ヌスバウムが指摘したように、「モノ化」は次のどれか、あるいはその組み合わせを含むしかたで扱うことであるとされることが多い。その対象の人物について、(1)単なる道具手段として扱う。(2)自律性や自己決定を尊重しない。(3)主体性、自発性、能動性を認めない。(4)他と交換可能なものとして扱う。(5)身体的・心理的に傷つけ侵入が許容されるものとして扱う。(6)誰かが所有できるものとして扱う。(7)主観的経験や感情を考慮しない。特に、上のどれかのしかたで、人を性的に使用する、つまり他人を自分の性的な欲求を満足させるための単なる手段や道具として扱う場合に、それは「性的モノ化」と呼ばれる。性的モノ化については、近年の論者によっては、(8)人を単なる身体に還元してしまう、(9)人の価値をルックスのみで判断する、(10)その発言を封じる、などが追加されることがある（江口 2006, 2019）。モノ化および性的モノ化が倫

理的に不正であり少なくとも倫理的に問題含みであることは、「モノ化」については奴隷制度、「性的モノ化」については被害者の意志を無視した性行為、すなわち性暴力を考えるとわかりやすい。

ヌスバウムらの考え方では、「性的」モノ化の倫理的な不正さの源は結局のところ、人をモノや動物と同じように自分の欲望や欲求を満足させる「道具」として扱うことにある。しかし現実では私たちは、生活上の各種の協力や商取引などにおいて、お互いの明示的・暗黙的な同意のもとにおたがいを自分の欲求や利益のための道具として使わざるをえないし、実際に生活の大半をそのようにして過ごしている。したがって問題は誰かを道具として扱うことではなく、「単なる」道具として扱うこと、本人の自律や意志や同意を尊重しないということにある。

さて、性的モノ化は人をモノとして扱うこと、あるいはそのように見ることであるわけだが、アニメやイラストはそもそも特定の生身の人物をモデルにしたものではない。実写ポルノビデオのように、生身モデルを使用したものであるならば、たしかに人の性的モノ化ということが言える。しかしアニメやマンガなどは純粋な創作物である。この点で、萌え絵のような創作物を、性的モノ化に関する倫理的根拠から直接に解釈するのは簡単ではない。そこには字義通りには「人のモノ化」は生じていないのである。

萌え絵が描く対象は、その製作者の頭のなかのイメージでしかない。それでは、一部の論者によって萌え絵が性的なモノ化であるとされる理由はなんだろうか？

2.2 ステレオタイプ表現と社会的意味の押しつけ説

先にあげた牟田は、「女性の過度な性的描写」は、「女性を性的対象として見るステレオタイプな認識を強化し、少女の自尊心の低下をもたらす」ものであるとも述べている（牟田 2019）。社会学者の小宮友根らや堀あきこらも同様に、萌え絵に見られる女性の性的なステレオタイプの表現の問題を指摘している（小宮 2019a, 2019b, 2022, 堀 2019）。

このタイプの主張は、ポルノと性的モノ化をめぐる哲学的議論でもしばしば登場する。ポルノに代表される性表現が倫理的に問題なのは、単にモデルの女性を性的なモノとして描写し、使用するためだけではない。一部の性的表現は、モデル以外の他の一般の女性たちに対しても、「性的に魅力的なモノ（あるいは動物）」というステレオタイプを不正に押しつけている（impose）ために問題なのだ、という見解である。たとえば哲学者のティモ・ユッテンは、フェミニスト法学者のキャサリン・マッキノンの言葉を引用して次のように述べる。「性的にモノ化されるということは、自分が性的に利用されるべき人として定義されるような社会的意味を、自分の存在に対して押しつけられること」であり、「性的モノ化の本質は特定の社会的意味の押しつけ（imposition）にあり……女性の自律性と平等な社会的立場を傷つける」（ユッテン 2022, p.121）。ユッテンはこうした見解を、上で紹介したヌスパウムらのモノ化とは女性を道具として使用することだとする「道具扱い説」と対比して「意味の押しつけ説」と呼んでいる。

「意味の押しつけ説」は研究者のあいだでもまだ十分に検討されているわけではなく²⁾、評価するのはむずかしい。第一に、上のような見解は「性的なステレオタイプの表現」を問題にしているわけだが、なぜ「性的な」、つまり性的に魅力的に描かれたステレオタイプを特に問題にする必要があるのだろうか。一般に、メディアでの各種の表現はある程度は人間のさまざまなタイプに応じたステレオタイプに頼らざるをえない。子供は子供としてのなんらかのステレオタイプ、老人は老人としてのステレオタイプを前提として、そこになんらかの個性や差異をつけ加えることでたいいの表現物は成立している。ステレオタイプの表現しか含まない表現物はごく価値の低いつまらないものだが、ステレオタイプの前提をまったく排除した表現物というものがどのようなものになるのか私には想像できない。したがって、性的な表現物がステレオタイプの表現であるとされる場合には、「性的な」ステレオタイプが特別に問題とされてははずだ。しかしそれはなぜだろうか。

ユッテンは次のように言う。

性差別的な広告や男性誌、ミュージック・ビデオ、ポルノはみな女性を性的対象（sex objects）として呈示している。問題は、そのメディアが性的に露骨な題材を含んでいることではない。そうではなく、そのメディアが、女性は性的魅力と性的誘いへの応じやすさ（availability）によって適切に価値づけられ、扱われるという見方を促進していることが問題なのである。（ユッテン 2022, p.146）

この一文の評価が難しい。「女性は～によって適切に価値づけられ、扱われる」の部分の原文は“properly valued and treated”で、「～によって価値づけられ扱われるのが適切だ」と訳してもよいだろう。性的に魅力的な女性が、性的に魅力的だとして評価される（価値づけられる）こと自体は問題がないはずである。またそのように扱われることも問題がないだろう。「性的な誘いへの応じやすさ」と訳されている“availability”によって評価されるということは、「誘えば簡単に性的な関係をもってくれる」ような「イージー」な女性が（性的な文脈では？）高く評価されるということだが、これが事実なのか否かは私には判断がつかない。好意的に評価されるときもあれば、そうでない場合もあるだろう。そして最大の問題は、ある文脈で女性が性的な魅力と性的なイージーさで評価されることがあるとしても、女性の評価は性的な魅力とイージーさ「だけ」によるものなのか、またその評価なるものはどのような評価であるのか、ということだ。

たしかに、大学生の成績を性的な魅力やイージーさで評価するのはあきらかに不適切だし、大学教員や研究者を評価する際もそうした評価は不当だろう。人物の道徳性を性的な魅力によって評価するのも不適切だ。緊急時に救助活動をしなければならないときに、性的に魅力的な人物を優先することも不正であるし、むしろ奇妙で滑稽だ。しかし、性的な活動の文脈で、あるいはエンターテインメントの文脈で性的な魅力でその人物を評価することが不当だと言える理由はよくわからない。

おそらくユッテンたちが言いたいことはそうしたことではない。おそらく、メディアでの性的に魅力的な女性や男性の描写が、現実生きる私たちの生活における人の総合的な評価に影響をあたえており、特に女性をもつぱら性的魅力とイージーさだけで評価するような私たちの態度、つまり現実の私たちが現実の女性たちを、不適切な文脈で性的に完全にモノ化してしまう態度を促進しているのだ、ということだろう。

たしかにポルノその他の性的表現はそうした態度を阻害や非難はしていないように思われる。しかし積極的に「促進」しているだろうか？ これは現実の私たちの生活にかかわる経験的な問いであるはずだ。ユッテンは彼の主張を経験的な主張ではないと主張している。

意味の押しつけ説は、道具扱い説が目するような実際の道具扱いが生じていないときであっても女性が被りうる特別な害と不正——すなわち、自律性と平等な社会的立場を損うこと——の存在を明らかにする。……意味の押しつけ説は、女性たちが性的モノ化の結果として実際に道具扱いされているかどうかに関する経験的主張とは独立に、メディアの法規制や禁止を正当化する……（ユッテン 2022, p.152）

他の拙論で述べているように（江口 2023）、私は経験的証拠によらない思弁や観念論によって、メディア表現を非難し、また社会的に規制・禁止できるとする発想には強い危惧を感じる。

第二に、ある人物をあるしかたで描写することが社会的意味を押しつけている、ということの内実がわかりにくい。ある女性が性的に魅力的であり、それを当人も意識しそれを誇りに思っているときに、絵画や動画でそのように描くことが社会的意味を「押しつけて」いることになるだろうか？ 上で言及したユッテンは、ポルノ的な性的表現は、女性の個人が当人が望む自己呈示をおこなうことを困難にすると主張するのだが、これは私には理解しにくい。ある表現物が存在しているために、ある人物が望むようなかたちの自己呈示

をすることができなくなる、ということが理解しにくいのである。

第三に、過去の拙論で指摘したように、性的モノ化の道具扱い説においては、道具として扱われることに本人が同意していれば、あるいはそれを望んでいればなおさら、倫理的な問題はない。意味の押しつけ説によれば、モデルや表現物の製作者たち本人がどういう意図や欲求をもっていようが、結果的にそれが他の同種の人びとに対する社会的意味の押しつけとなるのならば倫理的に問題ありとされる。しかし、私が自分をどう呈示するかということを意思決定する際に、なぜ私と同種の他人に押しつけられるかもしれない意味とやらを考慮する必要があるのだろうか？ そんなことを要求されることは私の自律と自己決定の侵害だと言えないだろうか。同様に、ある女性が自分のセクシュアリティをポルノの形で表現したいと考えた際に、それが他の女性に押しつけることになる社会的意味とやらをどの程度配慮する必要があるだろうか？ つまり意味の押しつけ説は、一部の人の自己呈示の自由や自律を守るために、一部の人の自己呈示の自由や自律を軽視しようとしているのかもしれない。これがどのようにして正当化されるのか簡単にはわからない。

上と比較すればマイナーな論点もある。第四に、たしかに性的モノ化の「道具扱い説」とはちがって、ユッテンらの「意味の押しつけ説」はその表現物の題材が実在の人物である必要はない。マンガや萌え絵のような表現物であっても、それが女性に対して「社会的意味」を押しつけ、自律を毀損し低い社会的地位を強制するようなものならば非難すべきものと判断するだろう。しかし、ポルノに登場するような生身の女性、あるいはテレビドラマに登場するような女性に比べれば、「萌え絵」に描かれる登場人物は現実の女性たちとはずいぶん違った存在者であることは意識されるだろう。萌え絵はそんなに女性に類似性を感じさせるものだろうか？ またその鑑賞者が萌え絵と現実の女性の区別がつかないということがあろうか？

このような難点があるために³⁾、「道具扱い説」にせよ「意味の押しつけ説」にせよ、「性的モノ化」

という枠組みは、可能性はあるにせよ、萌え絵を考察する上ではなかなかしっかりした基盤と見なすのは難しい。しかし、「女性は性的にモノ化されている」という発想には人びとに訴えかけるところがあり、またたしかになにか重要なものを捉えているのではないかという印象はある。そして、実は「性的モノ化」の「モノ化」の方にはなく、やはり「性的」の部分の方に人びとの懸念のタネがあるのではないだろうか。そして、概念と観念論をふりまわすよりも、もっと私たちの実際の経験にもとづいた経験的な議論が必要なのではないだろうか。

3 文化と少女のセクシュアル化

3.1 「セクシュアル化」の概念史

ここまでは、フェミニスト思想・哲学の分野での性的モノ化批判を見てきたが、2000年代からはその影響を受けた心理学者たちの研究と社会的提言にも目を向けておく必要がある。哲学者らによる「性的モノ化」の分析に加え、性表現を巡る社会的議論には、もう一つ重要なキーワードがある。それは「文化のセクシュアル化」「セクシュアル文化」そして「少女のセクシュアル化」といった、ジャーナリストやメディア研究者、そして心理学者によって用いられた概念である。哲学・法学分野ではポルノの法的な規制の必要や是非を論じることが多かったため、露骨な性表現に注目することが多かったが、もっとマイルドあるいはごく示唆的な性的表現はポルノ以上にメディアで流通している。私たちが関心をもっている萌え絵騒動もポルノや露骨な性表現ではなく、ごく示唆的に性的なだけであるのだから、従来のポルノ的表現と性的モノ化に関する論議よりも広い範囲の研究に目を向ける必要がある。そしてやはりある程度メディア研究や実証的な心理学研究にもとづいた議論を見ておく必要がある。

セクシュアル化 (sexualization) という概念については、複数の由来があり、英語圏でもそのための言葉の混乱があるため、その概念の由来と変遷を見ておくことには価値がある。Duschinsky (2012)、McNair (2013)、Paasonen et al. (2020) などが、英語圏での社会的関心に限定されている

ものの、この概念の理解の参考になるので確認しておく。

この sexualization という言葉自体は、心理学分野では20世紀にはいってまもなく使われており、発達心理学では個人が男性あるいは女性として性的に分化し成熟する過程を指すものだった。また精神医学領域ではフロイト派によって、リビドーが特定の性愛対象に固定する過程を指すのにも使われる。また特に米国の精神分析業界では、患者が治療者に対してもつ「転移」、つまり患者が治療者にたいしてしばしば恋愛感情や性欲をもつようになる過程や結果を示すこともあったようだ。さらには上のふたつの混用として、子どもが大人に対して不適切な性的関心や性欲をもつようになる社会化の過程を指すこともある。また、子どもに対する児童虐待の問題意識が高まると、児童性愛 (ペドフィリア) 的な性的関心を指すようになる。この用法は現代まで使われている。

1960年代後半に欧米で生じた「セックス革命」と(特に女性の)「性の解放」の結果、若者のあいだで婚前交渉・婚外交渉はごく一般的になり、またマスメディアでの性的な表現も大幅に増加した。英語圏の(白人)ティーンエイジャーたちも、次第に低年齢で性的活動をはじめることが珍しくなくなる。それによる若年での妊娠件数などの増加が問題視された際に、少年少女の「セクシュアル化」という語が用いられた。

この時期には、思春期前あるいは思春期前期の少女たちを性的な存在として欲望の対象として描くことが話題になり、同時に問題視された。有名な映画作品としては、十代前半のブルック・シールズ (1965年生まれ) 主演の『プリティ・ベビー』(1978)、同じくシールズ主演の『青い珊瑚礁』(1980) などが、明らかに未成熟な女子を性的に魅力的で誘惑的なものとして描いている。同時期のシールズが起用されたカルヴァン・クラインのジーンズの広告は女性ファッションを一新したと言われるが、性的なほのめかしが印象的である(「私とカルヴァン(のジーンズ)のあいだになにがあるって? なにもないわ」)。

1980年代になると、MV(ミュージックビデオ)の影響で、音楽エンタテインメントの場で女性の性

的な魅力がかなり露骨に商品化される。たとえば音楽アーティストの麦当ナのセクシーな楽曲とダンスは若者に多大な影響を与え、大量の「ワナビー」（フォロワー）たちを生み出した。若年女子たちがセクシーな自己呈示をおこなうことが一般的になる。これは女性たちが十分成熟するまえに性的活動に参加しはじめることをも意味した。

1990年代には、女性運動の広がりや深化から、セックス／ジェンダーにまつわる諸問題が「社会問題」として前面化した。特に女性が被っている性被害に対する関心の高まりのなかで、女兒の性的被害がクローズアップされる。“sexualization”は、本来は大人の社会から性的に隔離されているべき子供を、大人たちの性的活動にひきこむことを指すようになる。同時に、ビデオ機器の普及ともなまって一般的になったポルノに対する批判も強まる。米国では1995年に Garbarino の『社会的に有毒な環境で子どもを育てる』（*Raising Children in a Socially Toxic Environment*）という書籍がベストセラーになる⁴⁾。この本をきっかけに、セクシュア化による子供の搾取が問題とされる。

2000年代には、英語圏の若者のあいだで「フックアップ」文化、つまり十分な交際を経ないセックスだけの関係や、ロマンチックな恋愛感情や互いの束縛の少ないセックスフレンド関係（fuck buddy/friends with benefit）が一般的になる。それに反応するように、多くの女性ジャーナリストたちが「文化のポルノ化」「ポルノ化文化」を問題視するようになる（Levy 2005, Paul 2005, Oppliger 2008, Sarracino 2009）。『女性優越主義者の豚ども』『ポルノ化完了(Pornified)』『はしたない (Skank) 娘たち』『アメリカのポルノ化 ((Pornification)』といったタイトルからわかるように、彼女たちにとっての問題は、1980-90年代に見られたフェミニストによるポルノ批判に見られるように、広範に普及したポルノによって男性が女性を性的にモノ化し一方的に楽しんでいることを問題視するというものだけではない。むしろ、ポピュラーメディアに強く影響された現代社会では、女性（少女）たちが性的に活動的になるだけでなく、みずから自分たちを性的なモノとして、あるいは商品として呈示しており、それをみずから熱望し楽しんで

さえいる、という現象に対する懸念である。少女たちが自発的にセクシーな服を着用しみずから「セックスオブジェクト」として男性の目をひきつけようとする傾向がはっきり見られるようになる。フェミニスト的には、商業的・性差別的社会では、もはや女子は真正な選択、あるいは自分の本当の利益になる選択ができなくなっているという意識が高まったといえる。

3.2 心理学者たちの「モノ化理論」と「自己モノ化」

社会のこうした流れのなかで、自己モノ化や社会のセクシュア化が、女性にたいして与えているネガティブな影響に関する実証的な研究も盛んになる。

1980年代から1990年代にかけて、日本を含む多くの先進国では、若年女性の摂食障害（拒食症）が急激に増加し社会問題となった。特に1990年代には思春期・思春期以前の患者も増加し「思春期痩せ症」として注目された。その原因として注目されたのは当然、女性の痩せ願望から来る極端なダイエットである。さらにその背景にあるものは、テレビや雑誌などの大衆メディアや広告において、体型がスリムでありながらセクシーな女性たちがモデルとして起用され、女性の体型についての人びとの意識を歪めてしまっていることだろう、とされた。

1970-80年代の第二波フェミニズム運動と、その「性的モノ化」の問題視の影響を受けた心理学者たちも、女性の問題としてのうつ症状や摂食障害などのメンタルヘルスの問題に積極的に取り組むことになった。特に注目されたのがフレドリックソンとロバーツの「モノ化理論」（Objectification Theory）である（Fredrickson and Roberts 1997）。先に見たように1980年代のフェミニスト運動家・思想家たちは、ポルノグラフィや売買春は女性の性的モノ化であり不正であると主張したわけだが、それを受けてフレドリックソンらは現代社会のメディア全体が女性を性的にモノ化しており、それが若年女性のメンタルヘルスに非常に悪しき影響を与えていると考える。

メディア上でも現実生活でも、女性の性的モノ

化を許容する文化があり、とくに若い女性たちがそうした文化の規範を内面化してしまい、自分自身を性的なモノとみなすことになる。これは、女性がモノとしての自分自身の身体を監視しコントロールしようとするという行動につながる（そしてコントロールしきれない）。さらにこれが、自分自身や他人の身体の羞恥や辱め（body shame）、内的な身体感覚異常などにつながる。つまり、若年女性たちは、メディアで注目され称賛されているような人びとの体型の基準に到達していない自分の身体を恥じ、また内的な感覚として自分の身体に嫌悪感を抱くといった結果に苦しめられる。さらにこれが、摂食障害、うつ病、性的機能障害などの若年女性に多いメンタルヘルス問題につながっている。はっきりした疾病の症状を出していないとしても、多くの女性が自分の身体に注意し監視しつづけるという心理的な負担を負っている。これが多くの女性の生活経験であるとする仮説的モデルである。

ここでフレドリクソンらにとって問題なのは、それまでのフェミニスト的な「女性の性的モノ化」として、女性たちが男性たちから性的にモノ化され使用されるという問題だけではない。むしろ、女性たちが自分自身を性的なモノと見なし、また自分自身を性的に魅力的なモノに仕立てあげ、人びとに向かってディスプレイしようとする危険な欲求と経験の問題でもある。この自分自身の身体をモノとして監視・管理し、性的に魅力的な身体として呈示しようとする欲求や行動は、「自己モノ化／自己客体化」（self-objectification）と呼ばれる。現在の SNS、Twitter や Instagram や TikTok で若年女性たちがかなりセクシーなセルフイー（いわゆる「自撮り」）やダンス動画などを披露していることを読者はよく知っているだろう。あれが自己モノ化行動の典型である。

こうした仮説的心理学モデルを実証することは当然なかなか難しい。実験的に示すことは当然非常に困難でありまた研究倫理的にも問題があり、社会統計的な手法によることも難しい。だが、フレドリクソンらは、「自己モノ化」が女性のメンタルヘルスにも、それ以外にも影響を与えることを実験的手法によって示そうとし、ある程度成功

し、多くの追試・研究フォローを生んでいる。

3.3 心理学者たちの「セクシュアル化」批判

フレドリクソンらの「モノ化理論」は女性の心理的問題および女性を取り巻く社会環境の問題を理解する鍵として注目された。2000年代にはアメリカ心理学会（APA）がこの問題を検討し社会的提言をおこなう部会（タスクフォース）を設置し、2007年に「少女のセクシュアル化」報告書を提出している（APA Task Force 2007）。

心理学者の Zurbriggen が委員長を務めたこの報告書では⁵⁾、問題とされる「セクシュアル化」には以下の四つの下位区分があるとされる。

- (1)人物の価値が、その性的魅力や性的なふるまいによって判断され、その他の特質が人物の評価から排除される
- (2)人物が、身体的魅力が、セクシーであることと等値されるような判断基準のもとにおかれる
- (3)人物が性的にモノ化される、つまり、その人物は、独立した行為や意思決定をおこなうものとして見なされず、他者の性的な使用に供される
- (4)セクシュアリティが人物に不適切に押しつけられる

(3)は従来からフェミニストたちによって問題視されている「性的モノ化」であり、この報告書で検討されている事例心理学・社会学的研究の多くはメディアでの女性の性的モノ化にかかわるものだ。(1)や(2)では、人物についての価値評価と性的な魅力やセクシーさのつながりに関心が向けられている。(4)は曖昧な表現であるが、子どもたち、特に少女たちを、(おもに男性の)性的な興味関心の対象とすること、そして、不適切に性的な主体と見なすこと、つまり、いまだ未成熟であり十分に自律的な性的な主体に成長していない子どもたちを性的に成熟した主体であるかのように見せかけることが含まれていると思われる。

APA タスクフォースによれば、テレビ番組、各種の広告、ネットその他のメディアでの少女の

セクシュアル化は多くの懸念がある。現代社会ではますますセクシュアル化と呼ばれうる現象が増加していて、それは弱者グループに危害を及ぼしているという懸念や不安が増加しており、有害なイメージに対してなんらかのコントロールをする必要があり、またメディア視聴者・ユーザーの側に対策教育が必要だ、とされる。

APA 報告書に続いて、同種の報告書が英国でも提出されている。心理学者のリンダ・パパドプロスが委員長をつとめた英国内務省の「若者のセクシュアル化」(2010)とキリスト教団体関係者のレグ・ベイリーが委員長を務めた英国教育省の「子どもはこどものままに：子どもの商品化とセクシュアル化」(2011)の二つが有名で、上のAPAの報告書とともに、その後さまざまに社会心理学者・メディア学者らによって批判検討されている (Papadopoulos 2010, Bailey 2011)。

3.4 セクシュアル化報告書でのエビデンス

上にあげた米国・英国での少女のセクシュアル化に関する報告書では、大量の心理学研究が懸念の根拠としてあげられている。APAの報告書でセクシュアル化に関する懸念につながるとして挙げられている研究群を簡単に見てみよう。ごく一部ではあるが、以下のような研究が参照されている (出典は省略する)。

- ・自己モノ化によって意識が断片化し、認知能力が下がる。たとえば女子は水着を着て数学テストを受けるとセーターを着た場合よりも点数が下がる (男子は女子ほど大きな違いはない)。フォロー実験では、論理的思考や空間把握能力も下がる
- ・思春期から、男女共学校の女子は自己モノ化をおこないはじめ、自分の数学の能力を疑い始めるが、女子校ではそういう現象が見られない。したがって自己モノ化と女子の理系 (STEM) 進学が少ないのは関係があるかもしれない
- ・自分の身体をモノとみてルックスを重視する女子は、ソフトボール投げの距離が短い
- ・自己モノ化と自己モニタリングは、自分の

身体に対する恥の感覚を増加させる

- ・自分をセクシー化された視線で見る若年女子は容姿不安が強い
- ・メディアで理想的な女性ボディを見たあとでは容姿不安が強くなる。写真ではなく、雑誌表紙の「セクシー」「すらっとした」などの文言を見ただけでも同様の結果が見られる
- ・自己モノ化とセクシー化は間接的に身体的健康にも影響する。たとえば身体不満と喫煙習慣のあいだには相関がある
- ・MVや女性雑誌をよく見る女子大学生は、性的モノ化された女性像や伝統的ジェンダーイデオロギーに親和的であり、授乳や月経、発汗などの身体機能にネガティブな態度をとりがちである

また自己モノ化は若者の将来の健康な性行動にも障害になることも報告されている。

- ・自己モノ化・セクシー化は健康なセックスライフにネガティブな影響がある。たとえば自己モノ化する思春期女子は、コンドーム使用率が低く、性的な自己主張もしない傾向にある
- ・テレビ番組は人々の性行動を正確に描いていると信じている高校生は、最初の性体験に不満を感じる。また女性は処女であることにも不満を感じる
- ・一般男性雑誌や男性テレビキャラクターを好きな大学生 (男女) は、最初のセックスはネガティブなものになるだろうと予想しがちである
- ・雑誌表紙で女性をモノ化する文言を読んだ女子は、性関係に興味を失う傾向にある

また、少女・女性のセクシュアル化は、少女だけでなく男性や成人女性にも影響を与えることが懸念されている。少年や男性については、メディアでセクシーな女性を見つづけることによって現実生活での女性たちに対する身体的・性的な評価が低くなること、自分の性的パートナーを魅力的

だと思わなくなる、日常生活におけるセックスに不満を感じやすくなり、愛情を媒介にしないセックスへの欲求を高める、などが報告されている。成人女性はより若く見られるための経済的・時間的投資を多くおこなうようになる。社会全体についても、性暴力被害に関する偏見（レイプ神話）を信じる傾向を強め、またセクハラや性暴力に寛容な態度をとるようになる、女性どうしもお互いをルックスで評価するようになり、また互いに対する評価が厳しくなる、などが懸念されている。

3.5 セクシュアル化への対抗

APA タスクフォースによれば、少女のセクシュアル化はこのように多くの重大な懸念がある。タスクフォースはその対策として次のような提言をおこなっている。

第一に、学校教育としてメディアリテラシー教育が必要である。一般的に各種メディアを批判的・懐疑的に見る方法を教えるべきである。そうした教育には、生徒の痩せ願望を減らす効果ありとの研究もある。また直接的に、性的モノ化に対抗するような教育を導入する可能性もあると示唆されている。

第二に、女子スポーツと課外活動を充実させることが提案されている。スポーツや課外活動を通して、身体のルックスではなく身体能力に目を向けるようにすると、性的モノ化に対抗できるよい効果があるかもしれない、という発想である。スポーツ活動には自己評価が高まるという研究がある。研究は少ないものの、スポーツ以外の課外活動（音楽活動やダンス）も同様の効果が期待される。

第三に、いわゆる「包括的」性教育の教育現場への導入が考えられる。つまり、性や生殖に関する単なる医学的な知識だけでなく、その社会的な意味や実践や各種の性的な問題群などを含めた教育をおこない、避妊や初体験を適切な時期まで「待つ」こと、各種のコミュニケーションスキルなどを学校で教えるならば、性的な健康まわりへのメディアの悪影響に対抗できるかもしれない。

第四に、家族の協力に関しては、テレビ番組を子どもと一緒に見て大人の立場からコメントを加

えたりすることによって、メディアの影響をやわらげる可能性がある。さらには、モノ化に反対する宗教関連活動や親たちの社会運動も有効であろうされている。

第五に、セクシュアル化に対抗する女子グループの形成を支援することも効果的かもしれないと示唆されている。また、草の根運動として、ブログや SNS を利用したセクシュアル化批判をおこなったり、フェミニスト的な書籍を子どもたちに推奨することも有効だとされている。

3.6 報告書への批判

こうした心理学的研究の結果の解釈は実はかなり難しいところがあり、またそれを利用した報告書での「懸念」については、その手法や解釈についてかなり強い批判に晒された。2009年に *Journal of Sex Research* に掲載された 2 本の論文や、その後の心理学者・メディア学者を中心にしたメディアでの性的表現の多様性に好意的な研究者たちによって、「セクシュアル化」の概念が曖昧であること、エビデンスとしてあげられている研究結果が恣意的・選択的すぎること、また研究結果の解釈の正当性に疑問があることに加え、なによりセクシュアル化のネガティブな影響のみに注目しそれを過大に表現し、またみずからをセクシュアル化している女性の主体性・能動性や楽しみ・喜びを無視していることが指摘されている (Lerum and Dworkin 2009, Vanwesenbeeck 2009, MacNair 2013, Paasonen et al. 2020)。

エビデンスの不足については「モノ化理論」や APA タスクフォース関係者たちはその後批判に対する応答をおこなっており、論争は継続中の様子である (Roberts et al. 2018, Zurbriggen 2018)。心理学での「モノ化理論」や APA のタスクフォースが提出したような研究は、若い女性たちの自己モノ化の問題に重きがおかれており、メディアにおける性的なモノ化が男性や社会に与える影響については若干食いたらないところがあるが、とにかくにも実証的な裏づけを見つけようとする点で注目する価値がある。哲学的な困難を多く含む性的に露骨なポルノをターゲットにした「性的モノ化」の概念よりは、より広い社会・文化の「セ

クシユアル化」という一般的な現象としてメディアにおける表現の問題を考察した方が実りが多いということはある。

メディア研究においてはむしろそうした「セクシユアル化」や「ポルノ化」が含む魅力や解放を肯定的に評価したものも少なくない。英語圏の性的モノ化やセクシユアル化をめぐる議論の背景には、性的主体性を称揚するポピュラー文化、男女のセクシーさを称揚する文化（「サブ」カルチャー）があり、そうしたセクシユアル化を好ましいものと見ない保守的な価値観と、特に少女が自己をモノ化し性的に魅力的なものとして呈示することが当人に与える影響についての懸念がある。哲学者のパトリシア・マリノは若い女性の自己モノ化と性的な自己呈示の欲求を、社会環境に応じた適応的選好の結果であると見なす立場に共感を示している（Marino 2022）。現実の若い女性たちの自己モノ化をそのように捉えることが妥当かどうかはこれから検討する必要がある。これは実証的な研究だけでなく、概念的・規範的問題の部分が大きい哲学的な問題でもある。

4 見通しと「性的消費」

本研究ノートでは英語圏の性的モノ化およびセクシユアル化にかかわる研究をざっと見てきた。これは日本国内における「萌え絵」騒動を理解する上での予備作業にすぎない。

おそらく、国内での「萌え絵」問題も、人（女性）の性的モノ化の問題というよりは、文化とメディアの（二次元表現に特化した特殊な）セクシユアル化の問題としてとらえた方が理解しやすい。TwitterやTikTokでセクシーな自己呈示をおこなっている若年女性たちは日本でも少なくないし、セクシーなコスプレを楽しんでいる女性たちもいる。「萌え絵」その他のセクシユアルな二次元画像のクリエイターたちの多くも女性だと言われている。さらにはその鑑賞者・享受者にも女性が多く含まれている。メディアのセクシユアル化は、単に男性たちが女性たちを性的にモノ化し享受している、という図式にあてはまるようなものではない。一部とはいえ女性たちが自己をセクシーなものとして呈示することに喜びを感じ、ま

たさまざまなセクシーな表現物を作り出し、同時に消費者として楽しんでいるのである。男性が女性を性的にモノ化しているというよりは、私たち全体が、実物としても創作物としてもセクシユアルな表現を享受している文化を作り出しているのである。

もっとも、英語圏に比較すると日本の大衆メディア文化自体はさほど実写の性的な表現を好んでいるとは私には思われない。現在の日本で好まれ、それゆえ「萌え絵騒動」のタネとなっているのは、少女アイドルや、少女を主人公にしたアニメ等、性的に未熟な「かわいい」文化だろう。青少年の主体的な性的欲求や活動が描かれているとは言えないが、かといってまったく直接的な性的な関心の対象として描かれているわけでもない。その意味で人びとは淡い「萌え」を楽しんでいると言えるだろう。そうした淡い「セクシユアル化」が私たちにとってどういう意味をもつのか、なにか強い倫理的な懸念が存在するのかといったことが議論されるべきことである。

萌え絵に関する国内の議論を考えるために、準備作業として英語圏で論じられている「性的モノ化」と「セクシユアル化」の問題をとりあつたが、最後に国内SNSでよく用いられる「性的消費」という語について簡単に触れておくことにする。

2010年代にSNSで「萌え絵」やポルノ的表現が批判される場合には、しばしば「性的消費」という言葉が使われているが、それが何を指しているのかは明確ではなく、アカデミックな文献に現われることもほとんどないようだ。樋口康一郎は、SNS上の性的な表現をめぐる論争でよく用いられる発言の例として、2018年にあるユーザーがTwitterでラノベ（ライトノベル）の表紙の女性を「性的消費の道具」と批判している発言を取り上げている（樋口2020）。樋口はこの「性的消費」という概念がどのようなものであるのかを説明しようとはしていないものの、現在主流になりつつある若年女性を描いた「萌え絵」が「性的消費」であるということは、それが「性愛の娯楽」として楽しまれていることであるとしており、それに一定の懸念があることを認めている。

ここでこの語についてごく雑駁な私自身の推測を呈示させてもらえば、この物語や表現を「消費」という考え方は、直接的・間接的に東浩紀の『動物化するポストモダン』(2001)の「物語消費」や「データベース消費」という発想に由来するかもしれない。ここでは十分検討することができないが、東によれば20世紀末の「オタク」文化の一つの特徴は、そこで楽しまれる創作物でのキャラクターや表現が極端に「記号化」されていることにある。鑑賞者は物語そのものに加え、キャラクターの猫耳やメイド服、特有の言い回しといった表現上の「記号」あるいは規格化された「お約束」そのものを楽しもうとする。

「性的消費」という言葉あるいは概念を東の「データベース消費」やその後のサブカルチャーに関する論議と関連するものだと考えるならば、「性的消費」として批判されているものは、断片化され規格化された(若年)女性の性的魅力の享受ということになるだろう。マンガやアニメは当然それなりのストーリーをもち、キャラクターも個性をもつわけだが、萌え絵を「性的消費」として非難する場合には、その制作者たちが女性の身体の一部や定型的な姿態を強調した表現様式を大量に生産し、鑑賞者たちが断片的かつ大量に鑑賞・批評しているという現象を指しているのではないかと思われる。こうした表現の享受にはどのような社会的・倫理的問題、あるいは有害さが存在するのか、それは現実の私たちの生活文化のセクシュアル化とどのようにかかわっているのか、が議論されるべきだろう。

補足：Objectificationの訳語と理解

補足として、概念の解釈と理解のために、“sexual objectification”の訳語の問題に触れておくことにする。この語の訳語として私が採用している「性的モノ化」の他に「性的対象化」や「性的客体化」といった言葉が使われることがあるが、後二者はそれぞれ若干誤解を招きやすい面がある。

「性的対象化」はおそらく性的な関心や行動(性的なアプローチや性的活動)の対象とすることを指すが、ある人が単に他人を性的な対象とすることそれ自体には、倫理的・社会的問題はさほ

ど存在しないと考えられる。私たちは日常的に他人に性的な関心をもつことがあり、またたいていは互いの同意の上で相手をさまざまな性的な活動の対象としているからである。問題があるのは、同意なしに性的な活動の対象とすること(たとえば痴漢行為や覗き見)である。通常は、誰かに対して性的な関心をもつこと自体を倫理的に非難することはできないことは言うまでもない。私たちのもつ関心の多くは不随意なものであり、どんなに禁止されようが関心をもってしまうことは避けようがないからだ。小児に対する性的な関心をもつことを異常であるとする人は少なくないだろうが、その関心をいかに他人が認識できるようなかたちで表明するかということについてはともかく、まったく不随意な内心のことであれば非難するに値するかどうかは明らかではない。ある人物を性的な対象とすることに問題があると言えるのは、単に人物を性的な「対象」とするだけでは不十分であり、その対象やその方法が不適切な場合にかぎられる。方法としては、ヌスパウムその他があげているような不適切な場合だと考えられる。このように、「性的対象化」には限定が不足しているために、訳語としてはあまりよい用語ではないだろう。

もっとも、表現物の倫理性に関して、不適切な対象を性的な対象として描くことの問題を指摘するために「性的対象化」の語が選ばれるということはある。たとえば幼い男児・女児を、性的な欲望の対象として表示し描くことに対して懸念や危惧、あるいは道徳的な憤慨を感じる人は少なくないだろう。このような場合は、「性的対象化」という語だけでは不十分で、「児童の性的対象化」のようなもっと詳細な表現方法が誤解を招きにくいだらうと思われる。

一方、「性的客体化」は「性的対象化」に比べれば、ヌスパウムや他の研究者が「性的モノ化」として懸念している要素の一部をもうすこし正確に捉えている。通常、性的な主体であるとは性的なことがらにかんして自律・自己決定をおこなう能力をもち、それを自由に行使することだ。それに対する性的な客体とは、性的な活動の(おそらく)一方的な対象であることを指すというイメー

ジを含むことになるだろう。このように「客体」は「主体」との対比の上で考えられており、「客体化」はある人物の主体性を認めないこと、単なる客体として扱うこと、あるいは客体として見ることを意味している。

人間関係において、あるいは人間のグループ間で、常に、あるいはたいていの場合、一方的な主体と一方的な客体という区別・対立が成立しているならば、性的客体化という表現もそれほど悪いものではない。しかし実際には私たちが人間関係のなかで一方的な主体と客体という関係にあるということは（通常は）ない。ある一つの行為に限ってみれば、その行為の主体と客体を区別することはできるだろう。たとえば大学の講義をおこなう主体は（たいていの場合は）教員であり、客体は学生である。しかし、「講義を聞く」という行為を考えれば、（たいていの場合は）主体は学生であり、客体は教員であるだろう。主体／客体という区別はそうしたある行為や事象をどう記述するか、ということにかかわるものであり、そうした記述、つまり行為や事象のとらえかたから独立したものである。

特に性的な活動において主体／客体という対がはっきりしている場合はそれほど多くないと思われる。

性的「モノ化」は、倫理学におけるカント主義的な（モノや動物はもたない「尊厳」という価値をもった）人と（せいぜい「価格」という価値しかもたない）モノという対比の上での訳語である。もしこのカント主義的な対比が重要であるならば、「モノ化」という訳語の方が誤解を招きにくだろう。

注

- 1) それぞれの「炎上」の詳細については、インターネット検索を利用してほしい。また堀 (2019)、是永 (2019)、樋口 (2020) なども参照。
- 2) 拙論 (江口 2019, 2013) でも同様のアイデアを紹介しているが、十分に扱えていない。
- 3) 他にも疑問は多い。拙論 (江口 2019) で指摘したように、私たちの生活のなかでモノ化されているのは女性には限らないし、また、性的にモノ化され使用されることですら私たちの生活のなかではごく重

要な経験でありえる。

- 4) ちなみにこの有毒 toxic という言葉は2020年代に「男性学」で批判検討されている「有毒な男性性」(toxic masculinity) という発想にまでつながっているように思われる。セクシュアル化、社会的な偏見、「男らしさ」などはどれも社会的な害であるだけでなく環境汚染や有害物質のように、社会的な「毒」として蓄積され子供や若者を蝕んでいく、というイメージなのだろう。
- 5) 「モノ化理論」を提唱したロバーツも委員に入っている。

参考文献

- APA Task Force on the Sexualization of Girls (2007) *Report of the APA Task Force on the Sexualization of Girls*, American Psychological Association.
- Bailey, Reg and Department of Education (2011) "Letting Children Be Children: Report of an Independent Review of the Commercialisation and Sexualisation of Childhood," Uk Department for Education.
- Duschinsky, Robbie (2012) "The Emergence of Sexualization as a Social Problem: 1981 – 2010," *Social Politics*, vol. 20, no. 1, pp. 137 – 156.
- Fredrickson, Barbara L and Tomi-Ann Roberts (1997) "Objectification Theory: Toward Understanding Women's Lived Experiences and Mental Health Risks," *Psychology of Women Quarterly*, vol. 21, no. 2, pp. 173 – 206.
- Lerum, Kari and Shari L Dworkin (2009) "'Bad Girls Rule': An Interdisciplinary Feminist Commentary on the Report of the APA Task Force on the Sexualization of Girls," *Journal of Sex Research*, vol. 46, no. 4, pp. 250 – 263.
- Levy, Ariel (2005) *Female Chauvinist Pigs: Women and the Rise of Raunch Culture*, Free Press.
- Marino, Patricia (2022) "Sexual Use, Sexual Autonomy, and Adaptive Preferences: A Social Approach to Sexual Objectification," in Boonin, David ed. *The Palgrave Handbook of Sexual Ethics*, pp. 111 – 128, Springer International Publishing.
- McNair, Brian (2013) *Porno? Chic!: How Pornography Changed the World and Made It a Better Place*, Routledge.
- Opplinger, Patrice A. (2008) *Girls Gone Skank: The Sexualization of Girls in American Culture*, Mcfarland Publishing.
- Paasonen, Susanna, Feona Attwood, Alan Mckee, John Mercer, and Clarissa Smith (2020) *Objectification: On the Difference Between Sex and Sexism*, Routledge.
- Papadopoulos, Linda and Home Office (2010) "Sexualisation

- of Young People,” UK Home Office.
- Paul, Pamela (2005) *Pornified: How Pornography Is Transforming Our Lives, Our Relationships, and Our Families*, Times Books.
- Roberts, Tomi-Ann, Rachel M Calogero, and Sarah J Gervais (2018) “Objectification Theory: Continuing Contributions to Feminist Psychology,” in Travis, Cheryl B. ed. *APA Handbook of the Psychology of Women: History, Theory, and Battlegrounds*, Vol. 1, pp. 249–271, Washington, DC, US, American Psychological Association.
- Sarracino, Carmine (2009) *The Porning of America: The Rise of Porn Culture, What It Means, and Where We Go From Here*, Beacon Press.
- Vanwesenbeeck, Ine (2009) “The Risks and Rights of Sexualization: An Appreciative Commentary on Lerum and Dworkin’s “Bad Girls Rule,”” *The Journal of Sex Research*, vol. 46, no. 4, pp. 268–270.
- Zurbriggen, Eileen L. (2018) “The Sexualization of Girls,” in Travis, Cheryl B ed. *APA Handbook of the Psychology of Women: History, Theory, and Battlegrounds*, vol. 1, pp. 455–472, American Psychological Association.
- 東浩紀 (2001) 『動物化するポストモダン：オタクから見た日本社会』, 講談社.
- 江口聡 (2006) 「性的モノ化と性の倫理学」, 『現代社会研究』, 第9号, 京都女子大学.
- (2019a) 「性的モノ化再訪」, 『現代社会研究』, 第21号.
- (2019b) 「『宇崎ちゃん』ポスターは「女性のモノ化」だったのか? : 性的対象物という問いを考える」, 『現代ビジネスオンライン』, 2019年12月3日.
- (2023) 「悪いポルノ、悪い哲学：分析フェミニスト哲学者によるポルノグラフィ批判」, 『現代社会研究』, 第25号, 京都女子大学.
- 小宮友根 (2019a) 「表象はなぜフェミニズムの問題になるのか」, 『世界』, 5月号.
- 小宮友根・ふくろ (2019b) 「炎上繰り返すポスター、CM：「性的な女性表象」の何が問題なのか」, 『現代ビジネスオンライン』, 2019年12月8日.
- (2022) 「女性の描かれ方めぐる「炎上」はなぜ起きる?」, 『東京新聞』オンライン2022年3月18日.
- 是永論 (2019) 「メディア表現の批判と社会批判の実践」, 『社会学研究科年報』, 第26号, 立教大学.
- 樋口康一郎 (2020) 「ライトノベルは「性的消費」か：表現規制とライトノベルの言説をめぐって」, 大橋崇行・山中智省 (編) 『小説の生存戦略』, 青弓社.
- 堀あきこ (2019) 「メディアの女性表現とネット炎上：討論の場としてのSNSに着目して」, 『ジェンダーと法』, 第16巻.
- 牟田和恵 (2019) 「『宇崎ちゃん』献血ポスターはなぜ問題か：「女性差別」から考える」, 『現代ビジネスオンライン』, 2019年11月2日.
- テイモ・ユッテン (2022) 「性的モノ化」, 木下頌子・渡辺一暁・飯塚理恵・小草泰 (編) 『分析フェミニズム基本論文集』, 慶應義塾大学出版会.

Sexual Objectification and Sexualization of Girls

EGUCHI Satoshi

〈Abstract〉

As a preparatory work to understand the dispute about sexually suggestive public advertisement, I re-examine the concept of “sexual objectification” in the field of ethics and introduce the concept of “exualization” in the field of psychology. “Sexualization” of girls may be a more promising concept to analyze the issue, especially when it comes to anime illustrations and cartoons.

Key words : sexual objectification, sexualization of girls, sexual consumption, sexually suggestive illustration